

特集にあたって

新潟医療福祉大学

西尾 正輝

ディサースリアの領域では、Darley らが活躍した1960～1970年代以前は、専ら小児（脳性麻痺）に関心が寄せられていた。成人のディサースリアに言語臨床家が注目し出したのはこのころからのことであり、その歴史は新しい。しかも、Darley らが活躍した時代はディサースリアの定義や診断基準などについて国際的コンセンサスが得られたという点で特筆すべき進展がみられたが、治療に関してはほとんど進展がみられなかった。成人のディサースリアの領域で治療に対する進展が飛躍的にみられたのは、1980年代のことであった。こうした時代的情勢から、1960～1970年代は「診断の時代」と呼ばれ、1980年代は「治療の時代」と呼ばれる。

それでは、成人のディサースリアの治療の源流はどこに求めることができるのであろうか。文献学的に遡ると、その源流を1940～1950年代の一連の論文に求めることができる^{注1)}。そこで、本特集では、この黎明期とも称すべき時代の重要と思われる論文を6本厳選し、諸氏の協力を得て訳出した。私たちが日々の臨床でかかわるディサースリアの治療手技が、いつ、どこで、誰によって、どのようにして萌芽したのか。それを知るとはとても興味深い。そうした知識をもつことで、私たちが今すぐしている時代の歴史的な位置づけが可能となり、私たちが今後歩むべき方向も見えてくる。翻って言えば、歴史的潮流に無学な状態で行う臨床は、ややもすれば盲目的な治療となりかねない。

たとえば、2020年代に突入しようとする今日でもなお dysarthria を「構音障害」と呼称している方々は、その歴史を適切に理解していないからであろう。dysarthria がかつては構音障害であり、この時代に発話障害へと移行しつつあることは、今回特集の中で取り上げた Morley²⁾ の論文からもうかがい知ることができる。その後、Darley らによって dysarthria を構音の障害として扱うことは強く戒

めされ、運動性発話障害（Motor Speech Disorders）の一環として分類することで国際的コンセンサスが得られた。Darley ら³⁾ は、ディサースリアが構音の障害ではなく発話の障害であることを示すために、「一側の声帯麻痺による音声障害だけが単独に出現したのもディサースリアに含む」とまで明言した。そして、それ以降、Darley らの見解に異論を唱える研究者は皆目いない。Wertz⁴⁾ はかつてこうした dysarthria の定義の変遷について、dysarthria は「構音から離れた」と端的に指摘した。こうした歴史的背景を適切に理解するからこそ、dysarthria は構音の障害から発話の障害へと歴史的に定義が変遷し、それに伴いその治療内容も構音器官の治療から発声発話器官の治療全体へと拡大したことが理解できる。しかし、その歴史的背景を知らない人は、dysarthria の正しい定義も評価手技も治療手技も適切に理解することが難しく、なおも dysarthria を「構音障害」と呼ぶ。しかし歴史的潮流に理解ある人は、dysarthria をディサースリアと呼ぶ。

さらに、この源流はディサースリアばかりでなく、嚥下障害の治療手技の源流でもある。なぜなら、Murry ら⁵⁾ が端的に指摘しているように、嚥下障害の機能的訓練手技の多くは、そもそもディサースリアの訓練手技として発展したものであるからである。

この時代は本特集で取り上げた Morley²⁾ が指摘しているように「多くの文献において、成人の中枢神経系および末梢神経系の障害が論じられており、これらの障害が発話に及ぼす影響についても、頻繁に言及されてはいるものの、こうした障害に対するリハビリテーションを実施するにあたり、必要なプログラム内容についてはほとんど検討されていない」状況であった。この時代に著されたディサースリアの治療に関する文献は、科学論文というよりもエッセイ的な資料に近い。しかし、何もない状況から手探りで自らの経験に基づいて病態生理や治療手技を産み出し記載する文面から、しばしば深い博識と、鋭い洞察力、ならびに卓越した独創力に驚かされる。この黎明期の成果として、咀嚼法、プッシング法、ブローイング法、舌や口唇の基礎的運動などがこの時期に開発されたものであることが一連

注1)：ただし、この時代に用いられた dysarthria という用語が示す定義は今日用いられている Darley らによって示された定義とは異なることに留意する必要がある。これらの点について詳しくは成書¹⁾を参照とされたい。

の論文から理解できる。

さて、今回取り上げた論文の著者たちの中で2名の研究者について、ここで紹介しておこう。

まず、今回取り上げた6本の論文の中の3本⁶⁻⁸⁾の著者である Emil Froeschels (1885~1972) (図1) は、ディサースリアを含めて発話科学の領域で大きな功績を残した。彼は当時の医学の首都といわれたウィーンにあるウィーン大学における耳鼻科の教授であり、同大学の地下の一室で音声言語障害のあるクライアントの治療を開始した。1924年には、同士たちとともに国際音声言語医学会 (International Society of Logopedics and Phoniatics : IALP) を創設し、後に会長を務めた。また、1947年には New York Society for Speech and Voice Therapy を創設し、1972年に87歳で死に至るまで会長を務めた。

彼はディサースリア、吃音、音声障害、聴覚障害、失語症、早口症、鼻咽腔閉鎖不全など多岐にわたる領域に関心を示し、非常に多数の論文を精力的に著し、1952年には、脳性麻痺におけるディサースリアについての知見を体系化し、“Dysarthric speech : speech in cerebral palsy” を刊行した。Froeschels が開発した咀嚼法 (chewing method) やプッシング法などは、今日でも古典的手法としてディサースリアや音声障害の領域で用いられている。近年筆者が開発した「高齢者の発話と嚥下の運動機能向上プログラム (MTPSSE)」でも、プッシング法を近年の運動生理学的理論に依拠し変法として改変して採用している。

妻を亡くすと、Froeschels は孤独な生活に陥った。しかし、「今だけが重要なのだ」という哲学を貫き、死を恐れることなく職務に専念して生き、全生涯の間に計23冊の書籍と317論文を著した⁹⁾。

もう一人ここで紹介しておきたい研究者は、Samuel Dowse Robbins である。彼は、1887年にマサチューセッツ州で生まれ、ハーバード大学で学んだ。彼は自分自身が吃音をもっていたことから、吃音に関して科学的に取り組んだ。たとえば、1964年に J Speech Hear Disord 誌に発表した“1000 stutterers : a personal report of clinical experience and research with recommendations for therapy” や1965年に Cereb Palsy Rev 誌に発表した“Relation between insecurity and onset of stuttering” は彼の代表的な論文であろう。他方で、Robbins は吃音以外に、脳性麻痺、ディサースリア、音声障害を含めて発話障害に対する幅広い見識をもっていた。1931年に発話障害を、神経系の損傷に起因するディサースリア (Dysarthria) と、機能的もしくは器質的な障害である Dyslalia に区分する分類を提唱し、その分類体系は American Speech Correction Association に採用された。1926年にアメリカ言語聴覚協会 (American Speech and Hearing Association : ASHA) が

結成されると、副会長、会長を務めた。1953年に退職した後も音声言語病理学の領域で貢献し続け、妻の Rosa Seymour Robbins とともに著した“Correction of Speech Defects of Early Childhood” は Robbins の遺作となった。

私たちは、これらの先達の研究者たちが荒野に道を切り開いた恩恵を受けている。彼らが荒野に切り拓いた砂利道がその後の研究者たちにより一層整備されたおかげで、今日私たちが歩む道が用意されている。私たちはこれら先達の研究者たちの高邁な精神を受け継ぎ、この領域を発展させ、後輩たちに引き継ぐべく努めよう。

最後に、本特集を組むにあたり、翻訳の労をお引き受けくださった磯野千春先生、福岡達之先生、森 隆志先生、高橋圭三先生、南都智紀先生、高倉祐樹先生に心より感謝致します。



図1 Emil Froeschels 1924

文 献

- 1) 西尾正輝：ディサースリアの基礎と臨床 第1巻理論編。インテルナ出版、2006。
- 2) Morley DE : The rehabilitation of adults with dysarthric speech. Journal of Speech and Hearing Disorders 20 (1) : 58-64, 1955.
- 3) Darley F, Aronson A, Brown J : Motor Speech Disorders. Philadelphia, Saunders, 1975.
- 4) Wertz RT : Neuropathologies of speech and language : An introduction to patients managements. In DF Johns (ed), Clinical management of neurogenic communication disorders, pp1-96, Boston, Little Brown, 1985.
- 5) Murry T, Carrau RD : Clinical management of swallowing disorders (2nd edition). Plural Publishing Inc, 2006.
- 6) Froeschels E : A contribution to the pathology and therapy of dysarthria due to certain cerebral lesions. Journal of Speech Disorders, 8 (4) : 301-321, 1943.
- 7) Froeschels E : Chewing method as therapy : a discussion with some philosophical conclusions. AMA Arch Otolaryngol, 56 (4) : 427-434, 1952.
- 8) Froeschels E, Kastein S, Weiss DA : A method of therapy for paralytic conditions of the mechanisms of phonation, respiration and glutination. Journal of Speech and Hearing Disorders. 20 : 365-370, 1955.
- 9) Brodnitz FS : In memoriam Emil Froeschels. Folia Phoniatr (Basel) 24 : 77-78, 1972.